

安全運転チェックポイント...

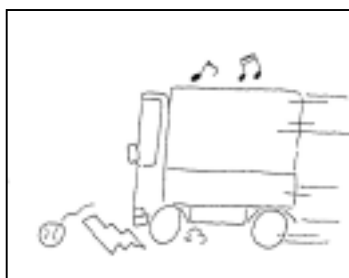
安全運転チェックポイント...

前回では、トラックの事故で最も多くを占める追突事故のチェックポイントについて掲載しましたが、今回は、「低速走行の危険」と「車内での脇見の危険」について紹介します。

低速走行の危険

ポイント

どんなスピードでも、安全確認が不徹底であれば、結果的に「スピードの出し過ぎ」



講習会等で、「スピードの出し過ぎは危険なので規制速度を守りましょう」という話をよく耳にします。決して間違いではありませんし、また、ほとんどのドライバーがスピードの出し過ぎに対する警戒心をもっていることでしょう。しかし、問題はどのようなスピードを「出し過ぎ」として認識し運転するかです。

一般的にスピードが低速になればなるほど安全だと認識されがちですが、実際には低い速度での事故が多いことから、低速走行ならば安全という認識は危険です。

人身事故の70%が時速40キロ以下で発生

トラックに多い追突や交差点事故の大半は、時速30キロ前後のスピードで発生しています。

ドライバーの大多数は、速度が速くなればなるほどその危険に対する警戒心や注意力を高めて走行しますし、また、それがハイスピードの場合は、自ら危険を招く運転であると認識し慎重運転を心掛けています。しかし、その反動のためか、低速になればなるほど危険認識や警戒心が乏しくなり、漫然運転や脇見運転等の危険を招きやすく、これに起因する事故が非常に多いのです。

従って、ハイスピードに伴う危険に対する十分な警戒心も当然必要ですが、低速走行にも危険があることをしっかり自覚することが大切です。流れが停滞しがちな混雑している街中の道路を走行する時は、この自覚が非常に大切です。

「スピードの出し過ぎ」や「安全速度」というのは、あくまでもその場その時の交通状況との関係によって決まるものであり、どんな速度でもその場その場の交通状況がしっかりと確認されていなければ、それは結果的には「スピードの出し過ぎ」なのです。

車内での脇見の危険

ポイント

車外の事物に見とれるだけが脇見ではない。



「脇見運転」というと、車外の風景や事物に見とれ、前方等の交通状況から目を離してしまうことだけを考えがちですが、追突事故などの大きな原因になっている脇見や前方不注意で意外に多いのが、「タバコに火をつけた」、「カーラジオ等のスイッチを操作した」などの「車内動作に伴う脇見」です。

特に最近では、CD等のオーディオや無線交信機を搭載している車、携帯電話を所持して運転しているドライバーも多く、これらを運転中に操作することから、前方等の交通状況から一瞬目を離したための事故が増加しています。（現在の道交法では、運転中の携帯電話の使用は罰則対象となっています。）

ドライバーの誰しもが、「脇見運転」の危険を承知しています。しかしながら、脇見を一切せずに運転することは不可能なことであり、無意識のうちにも脇見をしながら運転しているのが実態です。例えば、「メーターで速度を確認する」、「ミラーで後方や側方の状況を確認する」、「標識や信号を見る」等、これらも少なくとも前方から目をそらすことから、いわゆる脇見を伴っています。

従って、本当に危険なのは脇見そのものではなく、脇見をしているという自覚がなく無防備な状態になることが危険なのです。

特に車内動作に伴う脇見は、本人に脇見をしているという自覚が欠けやすく、車外への脇見に比べ

層危険です。

タバコに火をつけるだけでも、1～2秒前方から目が離れますし、携帯電話は、10ケタの番号を発進するのに4秒程の時間を要します。

このような動作は、前方等から目が離れ、「脇見運転の状態になる」ということを十分に自覚し、運転中は絶対に使用しない事を徹底してください。

2秒以上の脇見が危険といわれます。これは、危険回避に要する最小限の時間が2秒ということです。危険を発見し、回避行動をとるまでの反応時間が1秒、ブレーキが効いて回避するまでの時間がおよそ1秒ということです。

従って、前方から目を離す時は、危険回避に要する最小限の2秒に1秒を加えた3秒先の安全を確認した上で他に目線を向け、必ず2秒以内で戻すというテクニックを確実に実行することが大切です。

また、脇見が危険なのは一つの対象や方向に視線が固定され、目の動きが止まり、他の状況が全く把握できないことにあります。目をよく動かし危険を積極的に探し出すという意識が必要です。

